

題材②〔特派員メモ「青い珊瑚礁」飯高恒一

(朝日新聞平成19年4月13日金曜日 朝刊)より]

地震と津波に襲われた南太平洋のソロモン諸島。震源に近く多数の死者が出たギゾ島に入るため、約50キロ手前の島の町ムンダから1時間半近くかけてボートに乗った。首都ホニアラからギゾ島への空路の直行便が止まったためだ。

ボートの長さ約5メートル、定員10人。横殴りの雨で、ビニール屋根があっても乗客6人はびしょぬれになった。現地を見たい気持ちがはやり、恐怖心はなかった。

帰るまでには空路は再開されたが、ムンダに荷物を置いてきたため、ボートをまた使った。余震が続くギゾ島で不安な一夜を過ごし、津波再来を恐れて丘に上がる体験もした後だった。「津波は沖に出れば安全」と聞いていたが、出航直後に激しい波で揺れ、古いボートはいかにも頼りなく見えた。

でも海上の天候変化は速い。途中で雨がやみ、波も穏やかに。その時だ。しょっぱい香りの風に身をゆだねると、青空と珊瑚礁が視野に広がった。「ああ、私の恋は——」。何故か松田聖子の「青い珊瑚礁」を口ずさんでいた。

数百メートル向こうから、カヌーで海の散歩に出たらしい親子がこちらに手を振ってくれた。千近くの島々からなるというこの国の普段着姿。ほっと息をついた。

「漢字直しB」

じしんとつなみにおそわれ
た みなみたいへいようの
そろもんしょう。しんげん
にちかく たすうのししゃが
でた ぎぞうにはいるため
やくごじゅっきろてまえの

しまのまち むんだから

いちじかんはんちかくかけて

ぼーとにのった。 しゅと

ほにあらから ぎぞとうへの

くうろのちょっこうびんが

とまったためだ。

ぼーとのながさ やくごめ

ーとる ていいんじゅうにん。

よこなぐりのあめで びにー

るやねがあっても じょうき

ゃくろくにんは びしょぬれ

になった。げんちをみたい

きもちがはやり きょうふし

んはなかった。

かえるまでには くうろは

さいかいされたが むんだに

にもつをおいてきたため ぼ

ーとをまたつかった。よしん

がつづく ぎぞとうで ふうあ

んないちやをすごし つなみ

さいらいをおそれて おかに

あがるたいけんも したあと
だった。つなみは おきにて
ればあんぜんときいていたが
しゅっこうちよくごに はげ
しいなみでゆれ ふるいぼー
とは いかにも たよりなく
みえた。

でもかいじょうのてんこう

へんかは はやい。とちゅう

であめがやみ なみもおだや

かに。そのときだ。しょっぱ

いかおりのかぜに みをゆだ

ねると、あおぞらと さんご

しょうが しやにひろがった。

ああ わたしのこいは――。

なぜか まつだせいこの あ

おいさんごしょうを くちず

さんでいた。

すうひゃくめーとるむこう

から かぬーで うみのさん

ぽにでたらしい おやこが

こちらに てをふってくれた。

せんちかくの しまじまから

なるこのくのにの ふだんぎす

がた。ほっといきをついた。